

こちら

ロンドン漱石記念館

恒松郁生





中公文庫

こちらロンドン^{そう せき き おん かん}漱石記念館

定価はカバーに表示してあります。

1998年 8 月 3 日印刷

1998年 8 月18日発行

著 者 ^{つねまついく お}恒松郁生

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Ikuo Tsunematsu

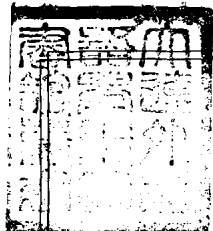
本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203211-3 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

81177



中公文庫

ア・ラ・マン・ダン 漱石記念館



大外701405335

学生

日本学芸大蔵

明治文学研究會

財団法人日本科学協会



中央公論社

目次

前書きにかえて——館長さん、もとは落ちこぼれ留学生

9

1
一冊の文庫が建てた記念館

漱石の記事とイギリス留学 17

にわかホテルマン、憧れのロンドンへ 20

フラットは貧しくも楽しい若者たちの城だった 27

落ちこぼれ留学生から漱石の研究者へ 31

スピーカーズ・コーナーでしゃべるジャパニーズ・ボーイ 41

挫折したロンドン大学から、今またお呼びが 46

漱石と同時代、ロンドンっ子に愛された日本人画家 49

漱石の「暗」と牧野の「明」 58

「いまのときを生かして用いよ」 63

ホテルマンから旅行会社のディレクターに 66

アフター・ファイブは大英図書館

70

ついに漱石記念館の誕生

77

ごく質素なイギリスの文学者記念館

82

新聞広告、たずね人は牧野義雄

87

事業が成功したとき、リタイアを決意

92

夏目漱石って、だれのこと？

96

漱石はロンドンを案外楽しんだ？

104

記念館は無名の研究家のための資料室

109

無理しないのが長続きのコツ

113

日本文学を日本語で聞ける聴衆に

121 117

新しい夢は外国人のための漱石賞

127

クラバム・コモン、銅像事件の教訓

ロンドン・イギリス自由自在

「お気に入りのパブは、けっして人に教えるな」

135

紳士クラブに、ぜひ一度！

143

名画も芝居もコンサートも身近に

152

3

オークションで美術品を集めよう

158

「アフター・ユー」の、やさしいひびき

163

ヴィクトリア朝と変わらない美しい町並み

168

女王様、今日は競馬でお楽しみ

172

ヨーロッパ人の別荘感覚

175

ヨーロッパ暮らしは自己主張が大事

179

「ビジネス・トーク」は「お近づき」ではない

182

見識のない日本のマスコミ

186

スコットランド・ヤード、奮起せよ!

189

イギリスは、きみを待っている

イギリス留学のメリットは大きい

199 195

英語ができなくても留学はできる

203

ステイ先で朝シャン!?

プレゼントがトラブルのもと

210 206

趣味を生かして英語力アップ

内気なイギリス人には、こっちから話しかけよう

214

後書きにかえて——日英の文化の掛け橋として

文庫版あとがき

224

ロンドン漱石記念館案内

漱石ゆかりの地

参考文献

インターネットで得られる情報

ロンドンの漱石に焦点を当てた研究書

こちらロンドン漱石記念館

館長さん、もとは落ちこぼれ留学生
前書きにかえて

九月の最終日曜日。午後五時になると記念館の一年が終了する。今年もごくろうさん、そんな思いをこめて片づけ、戸締まりをする。サマー・タイムはとくに過ぎて、ロンドンはずっかり秋に包まれている。

思い起こせばはやいもの、来年はもう創立十五周年だ。

一九八四年八月。ロンドンのテムズ河南、ザ・チェイスというところに漱石記念館を設立した。夏目漱石は文部省最初の英国留学生として一九〇〇年から一九〇二年までの二年間ロンドンに滞在し、その間に下宿を五回変えたが、その最後の下宿のはすむかいである。マスコミには「私財を投じて」という書き方をされ、ともすると金持ちの道楽かなにかのように誤解されることもあったが、実際はそうではない。

日本の大学を卒業し、労働許可証を得てロンドンにやって来て、ホテルマンをしながらロンドン大学の聴講生となり、旅行代理店に就職。そして自分で旅行会社を経営するようになるが、貧しいホテルマン時代から飲まず食わずでコツコツと集めてきた漱石その他の資料がいつのまにか増え、ついには専門の研究家でもなかなか手に入れないような貴重な資料まで集まった。

最初は、この膨大な資料をロコミで知った大学の先生たちに請われるままに狭い自宅で見せていたのだが、希望者が増えて対応が難しくなった。それで、なけなしの金をはたき、借金をして、なんとか一般公開できる場所を確保した。スタートはせいぜい、こんなところなのである。

なぜロンドンに？ なぜ漱石なのか？

それらしい風貌でもしていれば別だろうが、私はよくよく「漱石記念館の館長」には見えないらしい。しょっちゅうこんな質問をされる。

そう聞かれても、相手を納得させられる答えは見つからない。だれだってそうではないか。何かが好きだといって、そのわけはなかなか説明しがたい。だれかに恋したとして、自分にもその理由はわからないだろう。それと同じく、私はただ、ロンドンと漱石が好きなのだとしか答えられない。

しかし、それはともかく、いま考えるとよくもこんなことが出来たものと、われながら感心してしまう。なぜなら、ふつうの人ならいざしらず、私なんかは何をやっても中途半端でドロップ・アウトし続けてきた人間だからだ。

そもそもが落ちこぼれ留学生としての始まりが、どのようにして、少しずつでも自信を得るようになり、ついにはライフワークと思えるものにめぐり会えるようになったのか。それにはロンドンにやって来たことが、おおいに幸いしているのだが、理由は本書を読まれるとおわかりいただけるだろう。

在住二十年ならではのロンドン暮らしの話をということだったが、私の暮らしは記念館を除いてはあり得ない。そしていま一番語りたいのは、夢をもち続けて生きることのすばらしさである。

だれにでも、諦めないでいれば、自分を生かせるチャンスは必ずやってくる。それはいくつになっても、また男性であれ女性であれ、そうだと断言できる。努力がなかなか報われない時期もあるだろうが、そこで夢を捨ててはおしまいだ。何事にも遅すぎるということはないのだから、けっして諦めないでいただきたい。

夢を追う人はとかく非現実的な人間に思われたり、ときにはホラ吹き呼ばわりされたりするだろう。ひどい場合は変人扱いされるかもしれない。しかし、世間は世間。大事なの

は自分である。夢を抱いているからといって、だれに迷惑をかけるわけではなし、自分がやりたいことは堂々とやればいいのである。

幸せは、だれにもらうものでもない。自分でつくるものである。この本の前半は私が苦学生としてロンドンにやって来て、自力で漱石記念館を設立したまでの話であるが、なんのコネもない落ちこぼれ留学生でも、こんなふうにして自分の夢を少しずつかなえていくことが出来るのだと、そんなふうに読んでいただきたい。

後半では、私の夢をかなえてくれたイギリス、ロンドンの地に感謝をこめて、その魅力をはんの一部であるが紹介し、同時に近年ますます増えている日本人留学生のために、ぜひ知っておいていただきたいこと、留学でよりよい体験をしていただくための提案なども加えさせていただいた。

故中村天風先生は人生を生きるうえでの正しい基本として三勿（怒らず、恐れず、悲しまず）、三行（正直、親切、愉快に）を実行すること。良い習慣をつけるように心がけること。積極的な人と交際すること。消極的な感情・思考を抱かないようにすること。常に理想を描くこと。相手の気持ちになって考えてみることに。落ち込んでいる人には励まし、勇気づけてやること。常に明瞭に、はっきりとした気持ちでいること。苦しいこと、嫌なことがあっても心を肯定的に振り返ること。常に積極的な心を保つことの重要さを明確に説

いておられる。私は困難な問題に直面したときはいつも、天風先生の著書を読み返すようにしている。

イギリスは落ちぶれているとか、もう学ぶべきものは何もないという人もいるが、この国の歴史の厚みは、いくら円が強くなろうとも破ることは出来ないだろう。さらに、イギリスは料理の味はさておいて、じつに味わい深い国である。そしてロンドンには伝統の重厚さに圧倒されるかと思えば、世界の先端を感じさせる刺激的な部分もあったりで、とにかくこの不思議なアンバランスがこたえられない。

日本人はイギリス、ロンドンに一度やって来れば、必ずやみつきになってしまうというが、二十四年住んでいる私が今もって飽きず、ますますその魅力にとりつかれてしまっている。この点をうまくお伝えできるかどうか、はなはだ自信はないが、本書でかいま見ていただければ幸いである。

1

一冊の文庫が建てた記念館